

## ◇ 国 語

国 5-1～国 5-17 まで 17 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

単に芭蕉(せしやう)の気持ちの問題だけではなく、能との関係を考えると、『おくのほそ道』の読み方はまったく変わってきます。

それを考える前に、なぜ主人公の武士たちが修羅道や地獄に堕ちる能を、江戸幕府は庇護(ひご)したのか。この疑問について考えてみましょう。

本来ならば、支配階級の武士たちが堕ちていくなどという話はあまり歓迎されないように思えます。幕府という「勝者」の側が、なぜわざわざ非業の死を遂げた敗者をテーマにした能を認めていたのか。

それは敗者たちを鎮魂するという狙いがあったからです。あるいは、敗者たちのたたりを怖れて厄落としをしたとも考えられます。そうして見ると、日本の芸能には非業の死を遂げた者の魂を鎮めるものがケツコウ(くつこう)が多い。

これを前提に、『おくのほそ道』について考えてみましょう。『大辞林』で『おくのほそ道』を引くとこうあります。

「俳諧紀行。一卷一冊。松尾芭蕉著。1694年素菴清書。1702年刊。1689年3月末、門人曾良(そら)を伴い、江戸深川から関東・奥羽・北陸の諸地を巡って美濃の大垣に至り、さらに伊勢の遷宮を拝もうと、9月6日に大垣をたつまでの紀行（後略）」。

注目すべきは、刊行年です。教科書にも出てくるほど有名な作品なので、私たちは『おくのほそ道』は芭蕉が生きていたときから一般に読まれていたと思いがちですが、芭蕉は1694年に死んでいるので、実は印刷物となって読まれるようになったのは芭蕉の死後8年経ってからです。生前は、写本しかありませんでした。ですから、生前の読者は、主に蕉門下にいた弟子達です。芭蕉は写本を携えて弟子たちのところをまわり、一緒に読んでいたようです。

私たちは『おくのほそ道』を、芭蕉がこんな場所に出かけてこれを見た、こんな句を詠んだ、といった旅日記のように捉えています。実際に歩いてみると、旅をそのまま紀行文としたわけではまったくなく、実際の旅を土台に書いた「フィクション」的な色彩が強いことがよくわかります。『おくのほそ道』に描かれているのは、アの旅、つまり、芭蕉の表現する「幻の東北」という、夢のような幻のような世界を、読者が一緒に旅するための手引書なのです。

私は『おくのほそ道』の旅を、ロールプレイングゲーム（RPG）に喩えたこともあり。主人公は芭蕉で、旅のお供は弟子たちです。この全員がワキ方として、未知の人物たちと出会っていきます。

ゲームの中で私たちは芭蕉になり道に迷い、迷宮に誘い込まれていきます。そして各地で歌人や過去の人の魂や霊に出会います。この霊が能ではシテにあたるというわけです。

ゲームのように戦闘シーンこそないものの、魂や霊とコウカンし、怨霊を鎮魂し、四季折々の風景を言祝ぎ、「歌枕（和歌のテーマとなる名所旧跡）」地点を一見し、歩を進める。その過程で、参加者は、芭蕉や曾良の詠んだ「五七五」、たとえば「さみだれをあつめてすゞしもがみ川」（芭蕉）の発句に続けて「七七」、たとえば「岸にほたるを繋ぐ舟杭」（一栄）の連句をつくります。その「七七」にまた「五七五」、「瓜ばたけいさよふ空に影まちて」（曾良）とつけ、俳諧の連歌をつくっていきながら、能RPGの旅を完成させていくのです。

では、かりにこの旅が能RPGだととして、その目的あるいはゴールは何でしょうか。通常のRPGならば、敵を倒す、宝を見つける、といった目的があります。しかしもちろん芭蕉は敵と格闘しませんし、埋蔵金を探し求めたりもしません。

芭蕉の能RPGの主目的、それは先ほど触れましたが、鎮魂ではないか。私はそう考えています。イには、源義経の霊魂を慰めて、怨霊にならないようにすること、それが芭蕉に幕府から与えられた役割だったのではないかとんでもなく飛躍した話に聞こえるかもしれません。

しかし、私たちの先祖の豊かな発想を侮ってはなりません。芭蕉が『おくのほそ道』の旅に出発した年は、源義経の五百年忌にあたり、その第一の目的地である平泉こそ、義経終焉の土地です。これは果たして偶然でしょうか。

鎮魂というものは、私たちが思っている以上に、当時の人々にとっては大きな問題でした。日本の歴史には、さまざまな怨霊が登場します。強い恨みを残して死ぬと、その霊魂は怨霊になり、現世の人々に祟るのです。有名どころでは菅原道真、平将門でしょうか。『平家物語』の平清盛、平知盛あたりもそうです。なかでも、最凶の怨霊といえば「保元の乱」で讃岐に配流され、彼の地で亡くなった崇徳院（1119～1164）です。天皇、院にまで登りつめながらも、政治にホンロウされ、流された讃岐

で西行のすすめもあり、3年がかりで5部の大乘経を写経し、都に送りますが、朝廷側は受け取りを拒否します。その後舌を嚙み切って天皇家を呪いつつ生きながらの天狗となって死んだ……というすさまじい恨みを持った人なのです。

崇徳院の怨霊伝説は根強く、代々の天皇は皆、この崇徳院の鎮魂に尽力しています。なにしろ、天皇家を身内から呪い、国家転覆までもやりかねない怨霊は、崇徳院だけ。近代でも、孝明天皇は崇徳院の神霊のために京都に白峯宮創建の企画をし、明治天皇が、即位の礼の前にそれを実現しました。昭和天皇は、東京オリンピックの成功のため、讃岐で崇徳院を祀ったそうです（ちょうど崇徳天皇八百年祭に当たる年でした）。

さて、代々の天皇が恐れたのが崇徳院だとすれば、徳川將軍の綱吉がいちばん恐れた怨霊とは、だれか。徳川は武家ですから、恐れるのは武家で怨念を持って死んだ人……そう、源義経です。貴族の時代である奈良・平安時代を終わらせ、武士の時代である鎌倉時代を作った最大の功労者でありながら、兄に殺害されるという非業の死を遂げた悲劇の英雄です。武家にとっては崇徳院よりも怖い存在です。

芭蕉が生きた時代を治めていたのは、綱吉です。徳川幕府は、家康、秀忠、家光と三代まででその基礎が築かれました。徳川の治世の存続は続く將軍にかかっていましたが、四代が病気がちだった。そこでその重責を担うことになったのが綱吉でした。綱吉は、徳川幕府の継統と繁栄のために、従来の「弓馬の道（武芸の道）」から忠と孝と礼による文治政治へと大幅に転換し、湯島聖堂を建立したり、儒学者の林鳳岡を大学頭に任命し、儒学を発展させたりしました。また、貨幣経済を確立したり、捨子禁止令や服忌令（親類・縁者の死に際して喪に服すべき期間を定めた法）を定めたりと、文治のためのさまざまな改革・事業を行いました。そんな綱吉の大事業のひとつが、義経の鎮魂だったのです。

そして、それを誰に任せるか、というときに綱吉がまず相談したのは、儒教や和歌をよく理解していた側用人、希代の教養人でもあった柳沢吉保であったと思われる。そして、その吉保が歌の先生として師事していたのが、北村季吟です。

北村季吟は、医師の家に生まれ、まずは俳諧師として活躍しました。その後、歌人に転身し「幕府歌学方」の地位に就き、柳沢吉保の歌の師にまで上りました。將軍を歓待する庭の造園（東京の駒込にある「六義園」です）を任せるなど、柳沢吉保の北村季

吟への信頼は厚いものでした。鎮魂者として誰が適任か、柳沢吉保は季吟に相談をしたことでしょう。

季吟はまず、かつて崇徳院の鎮魂を行ったのはだれだったか、と考えた。それは歌人であり僧であり、そしてかつては武士であった西行法師でした。この人は平安後期に活躍した歌人で、名家に生まれ、北面の武士（容姿と武芸に抜きん出ている）として、和歌や故実にも通じ、前途有望な若者でしたが、20歳すぎに突然出家します。その後は、足の赴くままに各地を旅して歩き、質素な草庵暮らしと歌を詠む生活を続けました。ヒヨウハクの吟游詩人です。

義経の鎮魂は、西行にヒツテキキする人でなければならない。ならば、当代一流の俳人である芭蕉しかいないであろうと季吟が考えた可能性は高い、と私は想像しています。なぜなら季吟は、芭蕉に俳人としての認可を与えた師であり、芭蕉の才能をもっとも知るひとりだったからです。

こうして芭蕉は、門人曾良を伴って、東京、深川を旅立ちました。

門人の許六が描いた芭蕉と曾良の旅装姿の絵『奥の細道行脚之図』（天理大学附属天理図書館蔵）があります。芭蕉の生前に描かれたので、そのウに一定の信頼はできると考えてよいでしょう。ここでは坊さんでもない芭蕉が僧の格好をして、しかも笠を前に持っています。ここにも能の影響を見ることができま。芭蕉は「ワキ僧」という、能で旅の僧に扮するワキ方の役にあこがれていたのです。「笠を前に持つ」のは、西行のトレードマークなので、「西行です」と芭蕉が宣言をしているポーズともいえます。西行は芭蕉よりも500年ほど前の人ですから、偉人を題材にした「コスプレ」といっていいでしょう。

とはいえ、偉人に扮する自分をパロディにすることも忘れません。芭蕉には「狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉」という句があります。人気の仮名草子（仮名や仮名まじりで書かれた物語や小説）『竹斎』に描かれた、うだつが上がらず、食い詰めて旅に出る京都の藪医者やぶいの竹斎という人物のスタイルを真似しているのです。竹斎の剽悍ひょうかんなユーモアは、能と表裏一体の狂言の役割でしようか。西行と竹斎、こうしてあこがれの物語の登場人物に自分をなぞらえて、芭蕉は旅を始めました。

（安田登『能 650年続いた仕掛けとは』による）

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ケツコウ

- ① 遺伝子のコウゾウ
- ③ コウワ会議を開く
- ⑤ 約束をリコウする

- ② コウガン無知な人
- ④ ジコウの挨拶

1

B コウカン

- ① 田舎にカンキョする
- ③ カンゼン懲悪の物語
- ⑤ カンキ雀躍する

- ② かなを漢字にヘンカンする
- ④ 諸事情をカンアンする

2

C ホンロウ

- ① 砂上のロウカク
- ③ ホウロウの旅に出る
- ⑤ シュウロウ支援を行う

- ② メイロウ快活な人
- ④ 弱者をグロウする

3

D ヒョウハク

- ① ヒョウザンの一角
- ③ 交通ヒョウシキ
- ⑤ イヒョウを突く作戦

- ② 無人島にヒョウチャクする
- ④ 今後の方針をヒョウギする

4

E ヒツテキ

- ① 不正をテキハツする
- ③ 悠々ジテキの生活
- ⑤ 大胆フテキな強盗

- ② ケイテキを鳴らす
- ④ テンテキ注射を行う

5

問二 空欄 ア・イ・ウ に入る最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア

① 未来

② 沈黙

③ 虚構

④ 伝聞

6

イ

① 常識的

② 具体的

③ 概念的

④ 逆説的

7

ウ

① 芸術性

② 抽象性

③ 写実性

④ 創造性

8

問三 傍線部（a）「芭蕉」とあるが、芥川龍之介が芭蕉の臨終を題材として描いた作品を、次の①～④の中から一つ選べ。

9

① 『草枕』

② 『武蔵野』

③ 『斜陽』

④ 『枯野抄』

問四 傍線部 (b)・(c) の意味として最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(b) 希代

- ① めったに見られないこと
- ② 最もすぐれていること
- ③ 世に知れ渡っていること
- ④ 名家の出身であること

10

(c) 故実

- ① すでにこの世を去った偉人たちが遺した名言
- ② 古くから伝えられてきた馬術・弓術などの武芸
- ③ 中国から伝わった故事・教訓などの知識
- ④ 儀式・法制・作法などの古い規定や習慣

11

問五 傍線部 (一) 『おくのほそ道』に関する本文中の説明として誤っているものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 『おくのほそ道』は芭蕉の旅の実体験に基づいて書かれているが、意図的な脚色が少なからず加えられている。
- ② 『おくのほそ道』は芭蕉の生前は出版されることはなく、写本として弟子たちに披見されるにとどまっていた。
- ③ 『おくのほそ道』は源義経の五百年忌に書き始められ、その中には芭蕉の弟子たちの句も収録されている。
- ④ 『おくのほそ道』は江戸時代に執筆された作品であるが、その本文は現代の教科書にも取り上げられている。

12

問六 傍線部(二)「私は『おくのほそ道』の旅を、ロールプレイングゲーム(RPG)に喩えたこともあります」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

13

①主人公(芭蕉)が弟子たちと力を合わせ、旅先で遭遇する様々な問題を解決しながら霊を倒していく様を、読者が追体験できるから。

②主人公(芭蕉)が弟子たちと句を創り、その経験値を積み重ねることで新たな創作技法を獲得していく様を、読者が追体験できるから。

③主人公(芭蕉)が弟子たちと未知の世界に迷い込み、様々な人物や霊と出会いながら先へ進んでいく様を、読者が追体験できるから。

④主人公(芭蕉)が弟子たちと幻想的な世界を旅し、数々の謎を解きながら未知の宝を探し求めていく様を、読者が追体験できるから。

問七 傍線部(三)『奥の細道行脚之図』とあるが、そこに描かれた芭蕉像に対する筆者の判断として最も適当なものを、次の

①～④の中から一つ選べ。

14

①芭蕉は能のワキ僧を好ましく思っつて僧の姿を模した上、西行らしさを演出すべく笠を前に持つポーズをとつた。

②芭蕉は能に登場する旅僧にあこがれを抱いて出家し、さらに西行への思慕から笠を前に持つポーズを取つた。

③芭蕉は能のワキ僧に憧憬を抱きつつもその形を真似せず、あえて実在した偉人である西行のコスプレに徹した。

④芭蕉は能の旅僧や西行を模して僧形で笠を前に持つポーズを取りつつ、そこに竹斎風の剽悍な装いを取り入れた。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 天皇家では、朝廷を呪い死後天狗になったと伝えられる崇徳院の怨霊を恐れ、代々その鎮魂に尽力してきた。
- ② 芭蕉は、もと俳諧師で後に幕府歌学方の地位に就いた北村季吟から、俳諧師としての才能を認められていた。
- ③ 非業の死を遂げた者の霊が登場するのは能独自の特色であり、芭蕉はその世界観を『おくのほそ道』に活かした。
- ④ 徳川綱吉は、柳沢吉保の歌の師であった芭蕉の実力を認め、源義経の鎮魂を目的とする旅を命じたと考えられる。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

長い人間の歴史をふり返ったとき、とくに近代以前の厳しい環境においては、ただ食を確保し、子孫をもうけ、生をつないでいくということ自体がきわめて困難な営みであったであろうことは、容易に想像することができる。しかし人間はそのような状況のなかでも、ただ生きることだけをめざしてきたのではなく、たとえば自分の周りにある自然の美しさに目を向け、それから受けた感動を詩や歌で表現したり、あるいは親しい者、愛する者の死に接して、人のいのちのはかなさを思い、生きることの意味について考えたりしてきた。あるいは人生や社会のなかでさまざまな苦難に出会ったり、矛盾を目のあたりにしたときに、心の安寧を得る道を探ったり、あるべき社会のあり方についてシサク<sup>A</sup>を重ねたりしてきた。

そのような営みを、大きく文化という言葉でひとくくりにすることができるであろうが、それによってわたしたちはわたしたちの生活を豊かなものにしてきた。<sup>こ</sup>文学や芸術、宗教や哲学という営みがなければ、わたしたちの生はきわめて貧しいものになっていたにちがいない。

文化は、環境などさまざまな条件のもとで、そして長い歴史のなかで作られられてきたものであり、それぞれに独自の内容をもつ。それぞれの文化はそのなかで生きる人々のものの見方や ア に結びついている。そのためわたしたちは、異なった文化に出会ったとき、しばしばその違いに驚かされることがある。たとえば外国に出かけたときに、ある種類の肉を絶対に口にしない人や、外出するとき必ず頭にかぶりものをする人に出会うが、その厳格な意志にはいつも驚かされる。

ふり返ってみれば、明治の初め、西洋文化に出会ったときの人々の驚きはきわめて大きなものであったと考えられる。産業や軍事に関わる技術、議会や学校、郵便などの制度、洋服やダンパツ<sup>B</sup>といった風俗など、すべてのものが驚きの対象であったにちがいない。福沢諭吉は幕末から明治の初めにかけて刊行した『西洋事情』の初編の冒頭で「文明の政治」について論じ、それに求められる第一の要件として「自任意<sup>じい任意</sup>」を挙げた。Liberty, freedom という言葉を福沢はこのように訳したのであるが、それを、国法が寛<sup>ゆたか</sup>かで人をソクバク<sup>ソクバク</sup>しないこと、また人が貴賤の区別なく、みずからの意思に従って職業に従事し、みずからの才

能や力を発揮することと説明している。『西洋事情』の冒頭で福沢が「自由」について論じたことは、福沢がそこに日本の政治や社会と西洋のそれとのあいだのもっとも大きな違いを見ていたことを示している。日本の近代の歴史は、この明治の人々が抱いた驚きを消化し、自己のうちに内化していくプロセスであったと言つてもよいかもしれない。

文化の出会いがもつ意味は、何より、わたしたちを、自己自身の文化の枠組みのなかでは見えないもの、つまり異なったもの見方や世界観に目を向けさせるという点にある。わたしたちはそれに驚いたり、あるいはそれによって自分の世界観を揺さぶられたりすることを通して、みずからを顧みる目と、他者に対する共感の心とを養ってきた。そのことを通してわたしたちはわたしたちの文化をいっそう豊かなものにするともに、他者との **イ** の基盤を形成してきたのである。他者との出会いこそが、わたしたちがわたしたちの文化を豊かにする源泉でもあったと言ふことができる。

しかし、いま、そのようなわたしたちが長い時間をかけて作りあげてきた営みが大きな危機に直面している。それは、いま世界全体を覆っている **グロ** **ー** **バ** **ル** **化** の波と深く関わっている。グローバル化は多くの利便をもたらしたはしたが、しかし他方で、わたしたちの社会のなかに多くの問題を引きおこしつつある。

人々の関心がただ **ウ** な利益を追求することのみ向けられるようになったことが、いちばん大きな問題であると言えるかもしれない。そして、なりふりかまわない利益追求によって、さまざまな場所で格差が生まれ、対立や軋轢あつれきが生まれている。それは先進国でも途上国でもかわらない。民族や宗教、肌の色や性別、政治的な見解など、さまざまな観点から異質なものを発見し、その「他者」を **誹** **り**、 **ハ** **イ** **セ** **キ** することで、自分自身のアイデンティティや **エ** を確認しようとする風潮が生まれている。

このような状況のなかで、文化と文化、民族と民族、宗教と宗教のあいだの溝がいつそう深くなる方向へと動き始めている。長い時間をかけて作りあげられてきた文化や、他者との共存の営みに **キ** **レ** **ツ** が入ろうとしている。ここで踏みとどまらなければならぬという思いが強くしている。

そうした状況にすぐに **オ** を発揮する対処法があるわけではない。それぞれがそれぞれの歴史や文化を担っているこ

とを認め、尊重しあうことから出発する以外に道はない。そういう姿勢をもちながら互いに対話することが、いま改めて求められているのではないだろうか。人類はこれまでも異質なものに触れ、そこから刺激を受けることによってみずからの文化を、そしてみずからの生を豊かにしてきた。異なった文化や考え方は、お互いがお互いを豊かにしうる源泉なのである。その原点にいま立ち戻る必要を強く感じている。

(藤田正勝『日本文化をよむ 5つのキーワード』による)

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A シ|サ|ク

- ① 文章をテ|ン|サ|ク|する
- ③ 精神がサ|ク|ラ|ン|する
- ⑤ 大豆をア|ツ|サ|ク|する

② チョ|サ|ク|物を刊行する

④ 人名サ|ク|インを作成する

16

B ダ|ン|パ|ツ

- ① シユウダ|ン|で動く
- ③ ダ|ン|リョク性に富む
- ⑤ オンダ|ン|な気候

② ケツダ|ン|を迫る

④ ダ|ン|ワを楽しむ

17

C ソ|ク|バ|ク

- ① 問題にソ|ク|トウする
- ③ 身柄をコウソ|ク|する
- ⑤ 返済をサイソ|ク|する

② 説明をホソ|ク|する

④ ジンソ|ク|に動く

18

D ハイ|セ|キ

- ① 天皇にハイ|エ|ツ|する
- ③ 薬品をハイ|ゴウ|する
- ⑤ 困難をハイ|ジ|ョ|する

② ハイ|ブ|ツを利用する

④ 人心がフ|ハイ|する

19

E キ|レ|ツ

- ① ソウレ|ツ|な最期をとげる
- ③ レ|ツ|アクな環境
- ⑤ 式典にサンレ|ツ|する

② 組合がブンレ|ツ|する

④ セイレ|ツ|な流れ

20

問一 空欄 ア・イ・ウ・エ・オ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア ①倫理観 ②想像力 ③価値観 ④偏見 ⑤客観性 21

イ ①競争 ②共振 ③妥協 ④共存 ⑤信頼 22

ウ ①功利的 ②総合的 ③合法的 ④独善的 ⑤経済的 23

エ ①国籍 ②存在意義 ③共通性 ④仲間意識 ⑤国民性 24

オ ①普遍性 ②信頼性 ③相乗性 ④有効性 ⑤同一性 25

問三 傍線部（一）「文学や芸術、宗教や哲学という営みがなければ、わたしたちの生はきわめて貧しいものになっていたにちがいない」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

26

- ① 文学や芸術、宗教や哲学は、人間が生きていくという中では直接何の役割も果たさない。
- ② 近代以前では、食を確保し、子孫をもうけ、生きていくということ自体がきわめて困難な営みであった。
- ③ 現代の社会では、文学や芸術、宗教や哲学は、科学技術に比べてないがしろにされがちである。
- ④ 人間は困難な状況の中でも、自然の美しさやその感動、生きることの意味などを考えてきたが、それによって生活を豊かにしてきた。
- ⑤ 文化は、環境などさまざまな条件のもとで、そして長い歴史の中で作り上げられてきたものであり、それぞれに独自の内容を持つ。

問四 傍線部（二）「福沢がそこに日本の政治や社会と西洋のそれとのあいだのもっとも大きな違いを見ていた」とあるが、この「もっとも大きな違い」とはなにか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

27

- ① 西洋では日本に比べ、産業や軍事技術が驚くほど発達している。
- ② 西洋では国法が寛かで、人々がみずからの意思に従って職業に従事し、みずからの才能や力を発揮している。
- ③ 外国に出かけたとき、ある種類の肉を絶対に口にしない人や、外出するとき必ず頭に被り物をする人に出会う。
- ④ 産業や軍事技術の発達ではなく、議会や学校、郵便などの制度の発達である。
- ⑤ 日本の長い間続いた徳川幕府の政治とは違う民主主義の政治である。

問五 傍線部(三)「グローバル化」の意味として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ① 「世界は一つ」という考えが広く普及してきたこと。
- ② 大企業が世界を一つとして捉え、地球規模で経済活動を展開すること。
- ③ 国を越えて地球規模で交流や通商が拡大すること。
- ④ 小さな国が大国の利害によって振り回されること。
- ⑤ インターネットの発達によって、世界中の情報を知ることが出来ること。

28

問六 本文の内容と主旨が同じものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ① 地球のグローバル化は、多くの利便をもたらし、地球全体を豊かにするものである。
- ② 地球上ではなりふりかまわない利益追求によって、さまざまな場所で格差が生まれ、対立や軋轢が生じている。
- ③ 文化と文化、民族と民族、宗教と宗教のあいだの溝がいつそう深くなる方向へと動いているが、これは歴史的に仕方ないことである。
- ④ 地球のグローバル化のおかげでさまざまな格差や対立が生まれているが、私たちはもう一度異なった文化や考え方を理解し、尊重していく努力をしなければならない。
- ⑤ 人類はこれまでも異質なものに触れ、そこから刺激を受けることによって、みずからの文化を豊かにして来た。

29

問七 この文章のタイトルとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ① 民族問題の再現
- ② 異文化の理解について
- ③ 文学や芸術の意味
- ④ 地球のグローバル化の功罪
- ⑤ 福沢諭吉と西洋文化